

# 空中回廊

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

愛知県美術館友の会 会報

MEMBERSHIP

第 18 号

CON & BEN



### 作品寄贈のご報告

本年度も会員の皆さまのおかげをもちまして、友の会より愛知県美術館へ美術作品を寄贈することができました。寄贈作品は以下の4点です。

また、これに併せて作家ご本人からも16点の作品を愛知県美術館へ寄贈していただくことができました。

#### 寄贈作品：吉岡弘昭作

《Qの像》

1973年 ドライポイント・メゾチント・ビュラン／紙 40.0×36.5cm

《GON&BEN(YELLOW)》本誌表紙掲載作品

1976年 ドライポイント・ルーレット／紙 36.5×50.0cm

《23番街の悪漢》

1981年 ドライポイント・ルーレット／紙 45.0×60.0cm

《食卓の人(3人)》

1988年 ドライポイント・アケアチント／紙 45.0×60.0cm

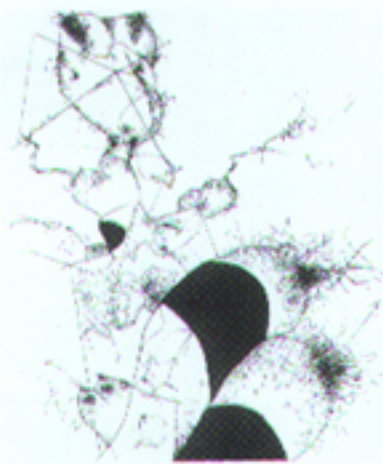
### 作家からのおたより

#### 忘れかけていた事

吉岡 弘昭

今回、県美術館で收藏していただく事になりました作品の中に、初期銅版画《変身シリーズNo.1》という作品があります。制作年は1969年（作者27歳）、当時の世情は70年の万国博を前に未曾有の好景気に浮かれ、楽天的な未来論が世界を席卷していました。そんな極彩色にわきたっていた時代に背を向けて私は古めかしく時代おくれにも見えた銅版画制作を始めたのです。1ミリの銅板の上いきなりとがったニードルで線を引き裂くように刻み付けながら制作したのがこの作品なのです。当時の時代の大波に必死で抗がい格闘する自分の姿を思い浮かべると、なぜか無謀で切ない気分が甦ります。

そして、ふいと20世紀の旗手、あるいは偉大なる羽虫の天才、太宰治の生涯を思い出すのです。『富嶽百景』の序にこんな事を書いています。「明治42年の初夏、本州の北端に生まれた気の弱い男の



《変身シリーズ No.1》

子が、それでも人の手本にならなければならぬと気取ってそうして躓いて、躓いて、けれども生きている限りは、一すじの誇りを持ってしようと、馬鹿な苦勞をしているその事を、いちいち書きしたためて残して置こうといふのが、私の仕事の全部のテーマであります。」この切なく悲しいナルシズム交錯する言葉の裏側からは、文学で渡世する事のうしろめたさと彼の芸術に対する含羞（はにかみ）がかくされているのを私は感じるのです。

今回の収蔵作品の選定でアトリエに来訪された学芸員のMさんが私の35年前に制作した《変身シリーズNo.1》の近年の刷りを手にしながら、おだやかに毅然と「当時、刷られたものはありませんか…」といわれた言葉に、私の中で忘れかけていた時を呼び戻す思いがいたしました。



吉岡 弘昭氏

#### 作家略歴

1942年 名古屋市に生まれる

絵画を独学する

リュブリャーナ国際銅版画ビエンナーレ招待出品

ソウル国際銅版画ビエンナーレ招待出品

現在 名古屋芸術大学非常勤講師  
日本版画協会会員

## 愛知県美術館 素顔の扉を開く

### 第六の扉 「企画・展示」空海と高野山展が開催されるまで

美術館の活動のなかで、皆様に特に強い関心をもって接していただいているのは次々と開催される企画展ではないでしょうか。では、その企画展は実際にはどのように計画され、オープンまでの準備が行なわれるのでしょうか。ご存知のとおり企画展というのは、作家の回顧展や特定の視点から美術動向を捉えてご紹介するものなどさまざまですが、当館では、そのほとんどは近・現代美術を中心としたものです。そして通常は当館の学芸員が企画提案したものを基本として、それに他館からの提案なども含めて内容や実現性などを考慮して、美術館として皆様にご覧いただきたいと考えられるものを開催してきました。ここではこれまでの当館の企画展とは性格が異なっていた「空海と高野山」展が、どのようにして愛知県美術館で開催されるに至ったかについてご紹介しましょう。

この展覧会は弘法大師空海入唐1200年を記念して、高野山の貴重な文化財を初めてまとめたかたちで展示公開するという趣旨で計画されました。そして以前から高野山の文化財調査を実施していた京都国立博物館が中心となり、高野山霊宝館の全面的な協力のもと、NHKが展覧会の基本運営を担当して開催準備が行なわれることになりました。また東京国立博物館での開催と、名古屋での開催が検討されました。そして空前の規模となるであろう展覧会に見合う広い展示室があって、保存環境などの条件が整っている愛知県美術館に対して開催の打診がありました。展覧会開催の3年ほど前のことだったと記憶しています。それを受けて検討を重ね、当館としては異例の日本の古美術展ではありましたが、準備にも積極的に参加したうえで開催しようという判断をしました。その理由は、何よりも高野山に伝えられた優れた美術品の数々を皆様に直接ご覧いただける機会を提供できるからでした。さらに当館としては、将来的な展覧会の開催に向けても、この機会に古美術なども扱うことのできる美術館となっておくことは重要なことと考えたからでした。

実際の準備作業は、京都国立博物館での開催のおよ



そ1年前から本格化しました。開催各館の学芸員をはじめ、高野山霊宝館の学芸員やNHKの担当者などによって企画委員会が組織されました。ここで展覧会の構成や運営方法などについての協議を重ねながら、現地での文化財調査なども実施して、およそ半年ほどかけて高野山のほとんどの重要な美術品が含まれる展示リストが決定されていきました。一つの展覧会が複数の会場で続けて開催される場合、特に古美術展では会場によって展示できないものが数多く出てしまうことがあります。この展覧会ではそのような事態を回避するために、半年ごとに一つの会場での開催として、作品保存上の問題で展示できないものが出ないようにも調整されました。こうして空海ゆかりの《髻髻指掃》や《諸尊仏龕》などの高野山の秘宝を初めとして、《阿彌陀聖衆來迎図》《仏涅槃図》などの名作、運慶の《八大童子立像》や快慶の《孔雀明王像》など、通常であればそのどれか一つを借用して展示することさえ非常に困難な美術品がこぞって愛知県美術館で展示されることになりました。さらに高野山霊宝館からは「同じ展覧会ではあるが、各館で会場構成や展示には個性を発揮してほしい」という要請があり、当館では運慶と快慶を中心とした鎌倉時代の彫刻を特集した展示空間を設けることにしました。そして長時間に及ぶ高野山での点検と梱包、さらに輸送と展示などの作業を経て展覧会が開催されたのです。

(愛知県美術館美術課長 村田真宏)

## ただいま準備中…

ベン・ニコルソン展

開催期間 2004年4月9日(金)～5月23日(日)

友の会特別鑑賞会 4月15日(木) 昼・夜

春の展覧会にふさわしい、透明感のある色調と軽やかな形態の作品に出会えるベン・ニコルソン展をご紹介します。

ニコルソンはイギリスの抽象美術の先駆者の一人であり、20世紀を代表する作家でもあります。父親が画家で母親の家系にも画家がいるという環境に生まれ、ヴィクトリア朝的なクラシックな絵画からスタートしますが、その後、キュビズムの影響を受けたセザンヌ風とも見られる半具象的な風景画や静物画なども描くようになります。彼の代表作とされるのは純粋に幾何学的な抽象形態から構成される一連のホワイト・レリーフの作品です。彼の芸術は、具象と抽象を生涯揺れ動き、幾何学的な形の中にも抒情性豊かな表現をしています。また、担当の古田学芸員にニコルソンの作品についてうかがったところ、「わび・さびの世界にたとえられることもある」とのこと。日本的な視点から見てもおもしろいのではないのでしょうか。今回の展覧会では、初期から晩年までの作品が約90点も展示されるため、ニコルソンの芸術の全貌を見渡すことができるでしょう。

私がベン・ニコルソンという名前をはじめて知ったのは、昨年、ロンドンのテート・ブリテンでホワイト・レリーフの作品を見たときでした。幾何学的な形に切り取られた板を何層にも重ねたような白一色の作品が強く印象に残って、この作家の名前を記憶に留めたのです。その作品は物質としての存在感を超えてイメージの広がりを感じさせ、白という色のもつ力強さと静けさを伝えていました。今回の展覧会でホワイト・レリーフに再会できるのをとても楽しみにしています。

愛知県美術館のコレクションの中にも、ニコルソンの《1933(スペインの絵葉書のあるコラージュ)》という作品があるのをご存知の方も多と思います。このコラージュ作品はニコルソンが最初のレリーフ作品を手がける直前に制作され、彼の芸術が絵画からレリーフへと展開する過程をうかがうことのできる重要な作品でもあります。それまでのニコルソンは「もの」を再現していたのですが、「もの」そのものを画に取り



《1933(スペインの絵葉書のあるコラージュ)》

入れることで、「もの」を構成するセンスを発揮するきっかけになっています。さらに、1つの平面をもう1つの平面と重ねていくという手法と、その平面の質感に対するこだわりはレリーフにもつながっています。このコレクション作品に見られる、引っかけ線によって絵具を削り取るという技法は、レリーフを幾何学的な形に掘り下げるという発想に通じています。コラージュ作品は1933年に集中的に制作されましたが、現存する数は少なくニコルソンの作品の中では貴重な存在なのです。この作品は10年前にイギリスで行われたニコルソンの回顧展にも貸し出されたことがあるそうです。いままで所蔵品展示室で何気なく見ていた作品が、企画展のなかで重要な役割を果たしているのを見るのは興味深いものです。古田学芸員も「泉美のニコルソンの作品は重要な作品なんですよ」と力説していらっしゃいました。わが子の晴れ姿を見るような感じであらためて見てみると新しい発見ができそうですね。

今回の展覧会につけられた「イギリスの詩情—重奏するかたち—」というサブタイトルはニコルソンの作風にぴったりの古田学芸員苦心の作です。決して有名とはいえない作家の展覧会を広く知ってもらうためにこうした努力がされているのです。その努力が報いられるよう大勢の方に興味をもって鑑賞していただきたいと思います。(折戸)

## 私のこの一点

### 立石大河亞《VINCENT》

森本 悟郎 友の会特別会員

立石大河亞（たていしたいがあ）は1941年福岡県伊田町（現 田川市）生まれ。武蔵野美術短期大学在学中の63年、読売アンデパンダン展に出品した《共同社会》で注目され作家活動に入る。69年から13年間のイタリア在住をはさみ、画家、漫画家、イラストレーター、絵本作家として活躍した。

立石作品の特徴を簡潔にまとめれば、第一にさまざまな要素（多くが日常的大衆的でキッチュなモチーフ）を等価に並置しパノラマ的に描くというもので、スペクタクル映画の大絵看板といった趣である。第二は形の変容（メタモルフォーゼ）と時空の連続性。第三は前者のバリエーションで、漫画の手法を使って物語性や時間の推移を表した「コマ割り絵画」であり、第四はそれらに確固たるリアリティーを与える巧みな表現力である。

89年に野焼きでテラコッタの小像を作ったことをきっかけに、陶による立体作りに取り組み始める。当初は縄文的な動物を手掛け、やがて前述の特徴を備えたイタリアの歴史的都市の建造物と花々が表裏とな

る複雑な構造をもった「世界模型」へと進化する。次いで96年5月から取り組んだのが画家シリーズで、《VINCENT》はその記念すべき第一作である。

タイトルの《VINCENT》はもちろんゴッホのファーストネーム。掲載の写真はこの像の裏面にあたり、耳を切ったゴッホの自画像からの引用である。その開かれたマントの胸部にはゴッホの下宿部屋を覗くことができ、部屋の窓の向こうは背面（正面）の空間につながる（お気づきのようにこれらは自画像の約束で左右が逆の鏡像である）。正面はゴッホが愛した浮世絵からキセルをもった花魁の大首である。ゴッホの頭の周囲にある糸杉などはこちら側の花魁の笄を隠しているわけだ。花魁には顔がなく、その部分はぼっかりと空洞が開き、その奥には広重描く梅屋敷の梅、下部にはやはり広重の隅田川と大橋（裏面の窓にちらりと見えるのはこれ）。隅田川には切り取られたゴッホの耳が浮かぶ（その形は三木富雄の耳！）。この川と橋はそれぞれ右側面のアルルの小川と跳ね橋につながる……。この作品はさまざまな要素の並置といい、形の変容と時空の連続といい、立体による立石作品の集大成といえよう。

生前、立石大河亞は画家シリーズを50点ぐらい作りたいと語っていた。しかしこの年のうちに13点を制作した後、病を得て中断を余儀なくされた。立石が肺がんによる心不全で逝去したのは98年4月17日。享年56歳。私が企画した中京大学アートギャラリーC・スクエアでの個展まであと3週間を残すだけというところだった。展覧会初日には立石のあまりにも早い死を惜しんで、遠方から旧友や知人が会場を訪れた。個展は画家シリーズ13点とその制作のためのドローイング（この中にはゆくゆくは制作されるはずだったものも数点入っていた）、死の直前に仕上げた油彩「税関吏ルソー」による展観だった。



立石大河亞《VINCENT》裏面

■まずは第3位…「ハンカチ」(クリムト) 1000円。おなじみ《人生は戦いなり(黄金の騎士)》をアレンジ、愛知県美術館オリジナルのシックなハンカチ。このほか、ウィリアム・モリスのハンカチも。

## 会員のたより

私と愛知県美術館 澤口 准子

北海道から愛知県に移り住んで30年、その間私は美術館に頻りに足を運んできた。美術展はもとよりアート・ライブラリーやビデオ室などを利用しまくったといっても過言ではない。それゆえ一昨年、学芸員資格取得のための博物館実習として、愛知県美術館での受入れが決まったことを教務から知らされたときは、本当に嬉しかった。「美術館の裏側が分かる」とまっ先に思ったのだ。

実際、美術館の裏側は私にとってまさしく迷路、自力での脱出は困難なほど、それは緻密な宝庫であった。5日間ではあるが、そこでびっしり講義を受け、毎日増えていく知識に喜びと感動を味わうことができた。そして、実習中に出された課題のテーマとして、常識では考えられないミケランジェロ展の企画を発案し、寝食も忘れてピエタの展示を考えていた夢のような時間を生涯忘れることはできないだろう。

現在、私は名古屋芸術大学で院生として彫塑研究を続けている。大学院の講義の中で、また愛知県美術館ゆかりの先生方に遭遇し、面映ゆくもわくわくした時間を過ごしている。

一人は昨年愛知県美術館から助教授として名古屋芸術大学に来られた栗田秀法先生。その美術史特論でパラゴネという諸芸術優劣比較論のルネッサンス期を中心とした面白い講義を受け、レオナルドやミケランジェロの新たな側面を発見し、より一層関心が深まった。同時に芸術相互の領域交流など今後の自分に課せられた課題として残っている。

もう一人は、入学以来受講を続けている浅野徹先生。浅野先生は元愛知県美術館長だ。博物館概論や近代美術史の授業の後、講義内容や続きを友人と図書館で語り合いたくなるのが常だ。大学院での研究発表形式の現代芸術特論もまた面白い。私は迷わずアンドリュウ・ワイエスの《1946の冬》を取り上げた。彼に特別な思いがあったわけではない。強いて言えば絵画の中に彫刻を感じたからだ。大学図書館や芸文センターのアート・ライブラリーで、あるだけの資料を借りて限な

く読んだ。そして調べて驚いた。ワイエスはアンドリュウだけでなく、父ニューウェル・コンバーズ、息子ジェームズと三代に亘ってアメリカが誇る画家一家であることを知った。

そして同じくらい驚いたのは、アンドリュウ・ワイエス展のカタログの中に高橋秀治さんの論文と藤島美菜さんの編集した年譜を発見したことだ。

実習のときふたりは私の指導学芸員だった。あの日のふたりの穏やかな表情を思い浮かべながら、感動して読み耽った。高橋さんの論文は無知の私にさまざまな知識と深い示唆を与えてくれた。ワイエスは今でも私にとっては、やはり孤高の存在である。ワイエスが今どうしているか教えて頂きたい。

浅野先生の後期の演習は、戦時下の画家がテーマであった。当時の資料を用いた時代を彷彿させる講義の後、それぞれに発表を課せられた。私は国吉康雄という岡山に生まれ、17歳でアメリカに渡って向こうで画家となった人物を選んだ。今年の夏に愛知県美術館で彼の回顧展があることはつゆ知らず、私は彼の絵の中の動きに彫刻を感じ、その秘密を探りたかったからだ。大戦中アメリカと日本の板挟みになって苦悩の人生を歩んだ国吉を知っている人はどれくらいいるだろうか。私は知らなかった。先生と出会わなければ知ることはなかったかもしれない。それに、数年前、県美の常設展で国吉の絵と出会っていなければ、この特異な画家を選ぶことはなかっただろう。知ってよかった。秘密はこれからも探り続けようと思う。そして、愛知県美術館での展覧会も大いに期待し、今後も大いに利用しようと思う。



国吉康雄《誰かが私のポスターを破った》1943年

## 美術館から 平成15年度新収蔵作品の紹介

愛知県美術館では、愛知県文化会館美術館の収蔵品2,516点（うち藤井達吉コレクション1,460点）を引き継ぎつつ、1988年から新たな収集方針のもとで収集を始め、昨年度までに1,156点（うち木村定三コレクション344点）の作品を収蔵しています。

今年度の収集作品は、購入5点、寄贈127点（友の会分を含む）の計132点です。これとは別に、木村定三氏夫人の木村美保子氏からは、木村定三氏が遺された、3件6点の重要文化財を含む美術品2,920点をまとめてご寄贈いただき、木村定三コレクションは3,264点になりました。これらの作品は、今後も〈木村定三コレクション室〉で随時公開していきます。

愛知県美術館友の会ははじめ、貴重な作品をご寄贈くださいました方々に御礼申し上げます。

### 【購入】

- ・加納光於：洋画1点
- ・杉戸洋：洋画4点

### 【寄贈】寄贈者別50音順

- ・愛知県美術館友の会（吉岡弘昭：版画4点）
- ・浅川幸男氏（オノサト・トシノブ：版画2点）
- ・浅野徹氏（黒崎彰、秋岡美帆：版画計2点）
- ・木村美保子氏（絵画1,093点、彫刻98点、工芸1,239点、書跡169点、考古資料295点、資料26点）
- ・田淵安一氏（作家本人：洋画5点）
- ・佃秀實氏（佃政道：版画49点）
- ・松田みどり氏（パブロ・ピカソほか：版画6点）
- ・松永久氏（作家本人：洋画3点）
- ・柳原義達氏（作家本人：素描40点）
- ・吉岡弘昭氏（作家本人：版画16点）
- ・脇田チエ子氏（中村一美：洋画1点）

# 愛 知 県 美 術 館

今年は友の会10周年なんだって。

へえー！

10周年を記念しているいろんなイベントがあるらしいよ。

作家自身による作品解説や、美術館の裏側を知る講座など盛りだくさん！

詳しくは事務局だよりなどでチェックしてね！

# 友の会10周年

## 友の会活動紹介

平成15年度後半に行った、友の会の事業の一部をご紹介します。



■友の会会員限定講座  
山崎隆之講師「仏像の光背について」  
満員御礼！

■ボランティア  
多くの方が友の会活動を支援しています。



■ロビーコンサート  
今回は若手演奏家たちの素晴らしい音色を楽しみました。

## 事務局から

### 美術館支援とボランティア

友の会の活動のひとつに美術館支援があります。今年度は友の会に賛同していただいた作家のご好意により、4点もの作品寄贈ができました。これは友の会のかたちに残る支援で、他に類の無い支援です。また、企画展ごとに支援金を出しています。この他に、会員の方にはポスター掲示やチラシを置いていただけたところを紹介していただいたり、展覧会に友人を連れて来ていただいたりなどの広報支援もしています。

今後の活動のなかに、現行の会報の編集、催事の準備や受付等の友の会ボランティアの他に、美術館ボランティアを募り、美術館により関わりをもって支援できる友の会となることを考えています。会員皆様のご協力をお願い申し上げます。

表紙の作品は、吉岡弘昭《GON & BEN (YELLOW)》  
(1976年ドライポイント・ルーレット 36.5×50.0cm)。平成15年度友の会より愛知県美術館へ寄贈した4点の作品のひとつ。

## 平成16年度企画展のご案内

- ＜ベン・ニコルソン展＞ 4月9日～5月23日  
＜野見山暁治展＞ 6月4日～7月19日  
＜国吉康雄展＞ 8月6日～9月26日  
＜木村定三コレクションによる 熊谷守一展＞  
10月8日～12月5日  
＜20世紀の美術—境界をこえて＞  
12月18日～2005年2月13日  
＜山水から風景へ—自然をめぐる千年の旅＞  
2005年3月11日～5月8日

## 編集スタッフから

昨年から少し環境がかわり、授業などで各地の美術館へ行く機会が増えました。そうしてみると、再び愛知県を振り返ってみると、他県に負けないくらい美術館の多さ、バラエティーの豊かさに改めて気がつきます。わざわざ遠くへ行かなくても、少し足をのばせば行ける美術館がたくさんあることは、とても幸せなことです。(湯田)

今回は、「作家からのおたより」を吉岡さんに、「私のこの一点」を森本さんに、「会員のたより」を澤口さんに寄稿していただきました。また「ベン・ニコルソン展」について古田主任学芸員にお伺いし、「企画・展示」を村田美術課長に寄稿していただきました。ご協力ありがとうございました。

編集 水野 愛子/真野 良子/森 健次/伊奈 由希子  
湯田 文/平松 章子/折戸 祥子

協力 愛知県美術館企画普及課

発行 2004年3月  
愛知県美術館友の会  
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2  
愛知芸術文化センター内  
Tel 052-971-5511(代表) 内線347  
Fax 052-971-5604  
E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp  
美術館ホームページ:  
<http://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

デザイン/レイアウト 小島 篤/桑原 房子